

日風堂

第25号 1997年10月15日

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

急げ、いざなぎ流資料の収集・保存

小松 和彦

香美郡物部村に伝承される「いざなぎ流」信仰に興味をもつようになったのは、私が大学院修士課程二年生ときで、もう二十五年以上も前のことである。当時、高知市民図書館に勤務されていた本館の館長吉村淑甫氏の紹介で、物部村に民俗調査に入ったことがきっかけであった。「いざなぎ流」に出会ったとき、こんなに神秘的で独自と思われた民俗宗教が伝承されていることに驚きを禁じ得なかった。

それから約十年間、機会を見つけては物部村に通い続けた。日本列島の文化の多様性を物語る各地の民俗が、高度成長の波に洗われて急速に消滅しつつある時代であったので、独自の性格を示していたこの「いざなぎ流」も後継者を見出すことができずにまもなく滅んでしまうだろうという危機感が私を突き動かしたのである。

その頃、まだ物部村では多数の老夫たちが活動していた。私の手元にあるメモによると、その頃、私は、半田三郎、半田清喜、中山元次、小松袈裟馬、中尾貞義、中尾計佐清、小松豊孝、小松為繁、滝口弥久忠、高瀬清長、山崎千代喜、坂本福重、奥村作四郎、公文

吉太郎、森安林太郎、山中覚太郎、細木徳次、小松福馬、といった方々に会いしている。

この数を聞いて、いざなぎ流に興味を抱いている若い研究者からうらやましがられることがある。しかし、当時を思い出してみると、恵まれた条件のもとで調査を行っていたわけではない。むしろその信仰が強く生きていたため、調査がとて難しかったように思う。

しかも、難しかったのは調査だけではなかった。先行研究が吉村淑甫氏の祭文研究など数えるほどしかないのがある。したがって、研究の方向をどのように定めたらいいかもおぼつかない、まさに手探り状態での調査を強いられていた。

私が取った方法は私自身の興味をほとんど追究するというもので、このため調査は「呪詛祭文」や「式王子」（式の行い）、陰陽道を中心に進めるということになった。これはある程度成功したと思っている。しかし、いまから思うと、こうした問題に焦点を合わせた調査であったために視野が狭くなり、老夫たちが亡くなる前に聞いておけばよかった、見せていただければよかった

と思うことがじつに多いことに気づく。

二十数年経ったいま、いざなぎ流信仰の伝承者はわずか数人になり、老夫自身が認めるように、もはやいざなぎ流は文献のなかに記録されているというかたちでしか後世に伝えることができないうところまできている。しかし、その一方で、幸いにもこの間に、高木啓夫氏などの努力によっていざなぎ流信仰の内容はほぼ明らかになっており、民俗学界や世間においても、神楽研究や祭文研究、陰陽道研究などの関連から、その学術的な価値の高さがよくよく認められるようになってきた。

残念ながら、今後は、いざなぎ流研究は、聞き・参与調査から文献研究へと移行せざるをえないであろう。そのためにも、その前提となるいざなぎ流関係の資料の収集と保存が急務の課題となっている。これを進めるためには、いざなぎ流が高知県のみならず日本の文化史においてもまことに貴重な財産であるのだということをも多くの方々に知って貰わねばならない。つまり、もっと日本全国に向けて宣伝することが求められているわけである。

このたび開催される企画展「いざなぎ流の宇宙」がそのきっかけになれば、と念じている。いざなぎ流研究にたずさわってきた者として、私も微力ながら精一杯の協力をしたと思う。

（国際日本文化研究センター教授）

いざなぎ流の宇宙へ

会期 平成九年十一月十四日(金)～平成十年二月二十五日(日)

梅野光興

「こんな凄いものが高知県に！」というの、いざなぎ流を知った人の多くが抱く感想であろう。私も、いざなぎ流について知れば知るほどその感を深めているところである。

その「いざなぎ流」とは一体何なのだろうか。

高知県にも、かつて日本中どこもそうだったように、江戸時代には祈禱を行なう民間の宗教者が多くいた。彼らは陰陽師とも博士ともいわれ、占いをしたり、弓をたいて神や死者の靈魂を呼び出したり、憑きもの落としなどをなりわいにしていた。明治になって、これらの民間信仰は政策によって排除され、急速にその姿は消えうせていった。ところが、高知県物部村にあっては、これら民間の祈禱師が生き残ってきたのである。彼らの伝える手法は伝統的なものであり、その源流は中世にさかのぼるとも、土佐の神楽の古型が伺えるとも言われ、民俗文化財として第一級に貴重なものである(実際、土佐の神楽としてほかの地区の神楽とともに、国の重要民俗文化財に指定されている)。その流派には天台流、鎌倉

流、いざなぎ流などがあるというが、現在は「いざなぎ流」と総称されている。

神楽から祈禱へ

鬼のたいばんが現れ、劔をもった人たちが激しい舞をくりひろげる。そんな土佐の神楽の様子をテレビなどで見た人は多いだろう。十和、津野山、名野川、池川、安居、本川、岩原・永淵と、西から東へ四国山地の背骨に沿う



いざなぎ流のあるじ祭り(へぎの舞)

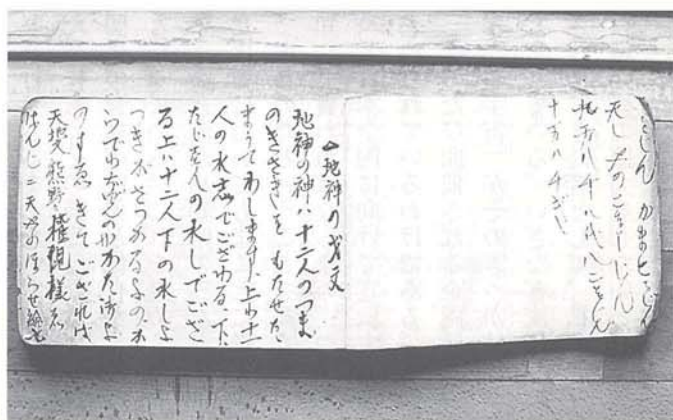
ように神楽が分布する。ところが、東部へ来ると、そのような神楽はぴたりと鳴りを潜める。かわりに散在しているのが、祈禱と結びついた舞である。その舞には、土俗的な仮面も登場し、舞も素朴な体裁だが、どこかほかの神楽に通じるものをもっている。しかし大きな特徴は、西部の神楽にはほとんど見られない、複雑で豊富な祈禱祭式を伝えていることである。

神を迎え、喜ばせ、悪魔を祓うという点では、西の神楽と東の祈禱にそれほど差はみられない。とすれば、いづどこではわからないが、地味な祈禱から人間の喜ぶ神楽舞へと発達してきた文化発展の歴史があるのだろう。その証拠に、いざなぎ流では、神を喜ばせる文句を唱えることを、「神楽」と呼んでいるのだ。

祭文の世界

いざなぎ流の祈禱の特徴のひとつに豊富な物語風の祭文を伝えることがあげられる。恵比寿、山の神、大土公、いざなぎ、天下正、七夕、呪詛などおおよそ二〇を越える種類の祭文が確認されている。これらの祭文は、中には物語といえないくらい簡単なものもあるが、ドラマチックなストーリー性豊かなものも多く含まれている。

例えば地神の祭文は、地神の十二人



地神の才(祭)文 中尾貞義氏蔵

の後のうち一番下の後のみに子供ができたため、ほかの十一人の後の妬みを受け、策略によって殺されてしまう。その死体から子供が生まれ、やがて父親に再会し、地神の跡継ぎになるという数奇な運命の物語である。

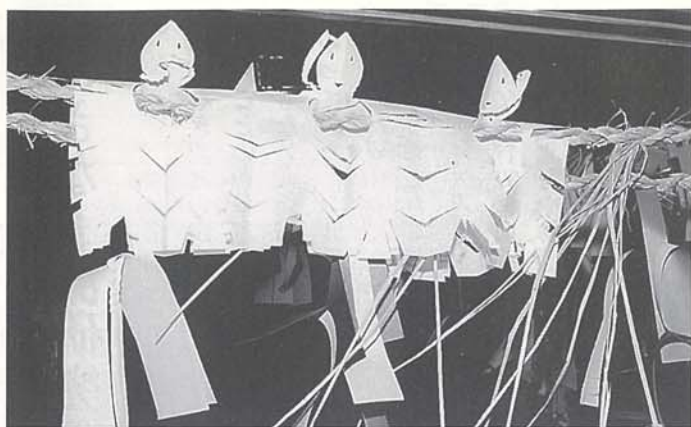
地神を祭る場合や、いざなぎ流の祈禱を行なう際に、この地神の祭文は唱えられる。そのほかにも、人類の誕生の物語や、雨をもらうために自分の娘を蛇にさしだす長者、四季と五行を象徴する五人の王子の戦争、十六才になり日本に降りて来る七夕姫、病気をもたらす山の神と乙姫の結婚など、さまざまな不思議な物語が語られるのであ

る。それらの物語世界はまことに、ワ
ンダーランドであり、現在のSFやア
ニメの原点というべき想像力に満ち満
ちた世界である。

実はこれら祭文の形式や内容には、
中世のお伽草子を思わせるものが多い。
先程紹介した地神の祭文も、「熊野の
本地」という中世の本地物の焼き直し
なのである。こんな所からも、いざな
ぎ流の時代が想像できそうである。

展示では、これらの祭文が記された
太夫の書物を紹介し、いざなぎ流の物
語世界にふれていただきたいと思う。

御幣にかたどられた神々



神楽の舞台を外敵から守る十二のヒナゴの幣

いざなぎ流のもうひとつの特徴とし
て、数多くの御幣を切り分けるとい
うことがあげられる。

その数はざっと百三十種類もあり、
さまざまな山の妖怪や神々を象徴する
幣が存在する。中には目や口を刻んだ
素朴な、しかしどこもなく不気味な幣
もある。それらは山に入って、山の靈
気を感じた宗教者たちが、その形を幻
視し、それを幣の形にあらわしたのだ
とも言われる。水神には蛇の形を切り
込み、ヤツラオウクツラオウと呼ばれ
る顔が八つも九つもあるとされる怪物
の幣、悪魔の物を祭り込むために袋の
ついた幣など変わった幣もたくさんあ
る。そして、この幣の形が集落や伝承
者によって微妙に異なっており、それ
らをあわせると幣の数はさらに増えて
いく。展示では、これらの幣をできる
限り並べ、神靈別に分類展示し、神々
のコスモロジーを理解できるように努
めたいと思っている。

おわりに

いざなぎ流は、高知県のみならず日
本の民俗文化を考えるうえで、大変重
要なものである。今回の展示では県民
にもあまり知られていない「いざなぎ
流」の全体像を提示し、高知県に伝わ
る貴重な文化遺産の存在を知っていた
だければ幸いである。



湯立て

「関連企画」

11月29日(土) P M 1:00 ~ 4:00

●公開実演

「いざなぎ流の宅神祭」

物部村いざなぎ流保存会の皆さんに
よって、祈禱や神楽、舞の様子を再現。
定期的な祭りでないため、滅多に見る
ことのできない家の神の祭りを、歴史
館に移築した民家を舞台に、ダイジェ
ストして再現します。

※会場になる民家は、スペースの関係
から見学人数に限りがあります。予約
受付はいたしませんので、当日御参集
して下さい。(なお暖房はありません
ので服装にご注意下さい)

11月30日(日) A M 10:00 ~ 4:00

●記念講演

「いざなぎ流御祈禱資料の

展開とその世界」

高木啓夫氏(高知県文化財保護審議会委員)

●シンポジウム

「いざなぎ流の生成とコスモロジー」

「祭文からみたいざなぎ流」

小松 和彦氏

「神楽からみたいざなぎ流」

山本ひろ子氏

「いざなぎ流の神体系と太夫」

斎藤 英喜氏

いざなぎ流展開催を記念して、講演
会とシンポジウムを行います。

※葉書に住所・氏名・電話番号をご記
入の上お申し込み下さい。(先着百名)

12月20日(土)、10年1月10日(土)

P M 2:00 ~ 4:00

(当日受付)

●講座「いざなぎ流」1、2 梅野光興

「関連出版物等」

●「いざなぎ流御祈禱の研究」高木啓
夫著、高知県文化財団発行(4369
円+税)

著者三〇年来の研究の成果を、式王
子や鍛冶天神信仰、弘法大師信仰など
いくつかの章に分け、集大成したもの。
●「いざなぎ流祭文帳」吉村淑甫監修、
斎藤英喜・高知県立歴史民俗資料館編
(A5判約160頁)

いざなぎ流の代表的な祭文を翻刻収
録。脚註・解説をほどこし、斎藤英喜
氏による総論を付した。山の神、水神
いざなぎ、すそ、大土公祭文など。

●ビデオ「いざなぎ流御祈禱」(約2
時間)

滅多に行なわれない1週間がかりの
大祭を、記録映像化。取り分けに始ま
り、湯神楽、本神楽、ミコ神祭祀、恵
比寿神楽、日月祭など儀礼の数々を取
録。(「祭文帳」、ビデオの販売は、企
画展スタート後になります)

いざなぎ流研究の頃

当館館長 吉村 淑甫 談

いざなぎ流との出逢い

祭りごとの一番古い記憶は、正月に親戚でもない人たちが私の家に集まってやっていたオンザキ様の祭りだ。オンザキ様は屋内神で、物部川の上流地域でまつられている。

私は在所村（現・香北町）に生まれた。祖父や曾祖父は美良布神社の神官だった。香北町や物部村はひとつの信仰領域と言えるだろうね。しかし私はいざなぎ流という名前すら、はじめは知らなかった。オンザキ様をまず知って、オンザキ様とは元はどういうものであったのかを考えるようになった。そのうち芸能史をやりはじめて、仮面に興味を持った。

昭和三十年代半ばのことだが、知り



合いから物部村の仙頭に仮面をまつる家があると聞いた。其処で古い祭りをするといい。訪ねてみれば、天井裏にいろいろな神様がまつってあった。

その家にあつたのは夫婦面がふたつだけ。聞けばその家は「大の氏子」で、他の仮面は「小の氏子」に配つてあるという。大の氏子は本家筋、小の氏子は分家筋という関係でね。物部村や香北町では、いざなぎ流の信仰組織が一族の系譜を形づくっていた。

又、十二面の仮面の外に十三番目として牛の面らしいものがあること、これは注目してよいと思う。

太夫を訪ね、訪ねて

いざなぎ流の神職のことを太夫という。いざなぎ流を調査しはじめた頃、太夫の半田宮右衛門さんのところで弓をやってもらった。宮右衛門さんは弓を叩いて七夕祭文を誦してくれた。

七夕祭文は祈禱に使われる。どんな祈禱かという、死者が出るとその影響を受けて思う人や死んで行く人が次々出ることがあるが、そんな状態を断ち切る祈禱だとのことだった。

宮右衛門さんの弓を叩くのを見て、こんな民間信仰が物部に残っていたの

かと感動し、次第にいざなぎ流に入り込んでいった。

その後、別府の太夫、中尾貞義さんのところへも泊まりがけで行った。貞義さんが家を建てかえたということで、何年ぶりかに四、五日もかかる大祭をした。そのときがいざなぎ流の祭儀に接した最初だった。この祭儀に中尾計佐清太夫も参加していた。

当時、別府までバスが一日に一、二便出ていたが、とにかくいざなぎ流の祭りは冬が多い。道が凍って危険だし、雪が降ると帰れなくなったものだ。

又、中尾計佐清さんを訪ね、ミコ神迎えを見たことも印象深い。山の奥の岩盤の露出した辺りの岩の割れ目のところから、計佐清太夫がミコ神を幣に遷す儀式を行なった。雪のちらちら降る日で、頬かむりをして幣を胸に抱え、ゆっくりゆっくり山を下りてくる計佐清太夫の姿が、今でも目に浮かぶ。

そうして、休みごとにいざなぎ流の太夫のもとへ通うことになった。そのうち土佐民俗学会が動き出した。私が糸口はつけたが、のめり込んでやっていったのは高木啓夫君ということになるだろう。当時、土佐民俗学会の会長だった桂井和雄さんは、いざなぎ流に特別な関心を示さなかったように思う。いざなぎ流はむしろ折口信夫の範疇で、桂井さんは柳田国男に師事し、心酔し

ていたからだったろう。

そのうち本田安次さんをはじめ、県外の研究者もいざなぎ流を調査しに来るようになった。

陶酔を呼ぶ祭文

高木君は儀礼の研究を深めて行った。私はいざなぎ流の神儀より、むしろ祭文に興味があった。祭文を採集しなければと思ひ、祭文を求めて岡ノ内や大栃などを訪ね歩いてるうちに、太夫の滝口さんから祭文を見せて貰うことになった。

いざなぎ流の祭文が面白いのは、御伽草子の系統にあることだと思う。

例えば七夕祭文は昔話の羽衣譚のひとつだ。天から舞降りて沐浴していた七夕女郎の羽衣を、狐師の小次郎が取って隠し、妻になれと強請するところから始まる。

祭文には濃厚な物語がある。こうした物語の面白さが地元の人々に支持されて、いざなぎ流が今日まで伝えられてきたという面もあるだろう。非現実的だが、古典的な物語世界であり、中世的といわれる土佐の民俗を象徴するよ

うな信仰世界だと思ふ。祭文は繰り返すほど、祈禱の効果があるとされる。いざなぎ流に特徴的な祭文の音調は、その繰り返しの中から生まれたものではないかと思う。山崎千代喜太夫はとりわけ歌うように節を

つけて祭文を唱えたものだった。のちの歌祭文の源流を見る思いがした。太夫らは眠るともなく覚めるともなく体を揺らしながら祭文を唱え続ける。祭文が繰り返されるうちに、祭りの場が陶酔に包まれてゆく。

時代の変化と太夫

この地方では神職も陰陽師と博士に別れていたようだね。明治四年の廃仏毀釈と国家神道の流れて神社が重視されるようになるまでは、神社の神官も陰陽道の儀式もやり、博士のような仕事もやらないと生活ができなかった。

神官であった私の曾祖父なども陰陽師太夫の作法を知っており、吉田神道の年占いなどもやっていたらしい。しかし、自分で自分や家族を占うということはなかったのではないかと思う。太夫の家の子であった私も四、五歳の

とき母親に中谷川の占師（博士）のところへ連れて行かれた。

私の先祖は中谷川から磯山神社の前に移って来て神社太夫をした。中谷川新助の分かれになる。屋地に椎の木があったことからか、姓は椎野。侍格で、横目として警察権を持っていた。

私の曾々祖父という人は、参勤交代の藩主のお供で江戸に行き十数年帰らなかったという。その間、他所から神職の子息を中継ぎ養子として迎えていた。曾々祖父が江戸からもどると椎野の株をわけて養子を帰し、椎野の姓が二つできた。

曾祖父までは神社太夫をしながら自分が食べるだけの畑を持ち、四季ごとの祭礼にでかけた。しかし、祖父の代になると太夫では生活が成り立たなくなり、今で言う銀行のようなことをは

じめた。小さい集落で地元の人に金を貸すような銀行だからすぐにつぶれ、やがて貸本や新聞、薬を商うようになる。

太夫の家には国学系の本がたくさんあった。太夫の商いとして、貸本屋や薬局は似つかわしいものだったと思う。漢方薬と本を一緒に置いていたから、本が薬草臭かったのを覚えている。陰陽師太夫の末路などというものはこうしたものではなかったか、などと思ったことだった。

太夫の家としての思い出は、オンザキ様の祭りにつながっていく。親父は歯医者になったが、祭りの前の晩には幣を切っていた。親父は幣の切り方を長男には教えておくと聞いていたが、実際に教えたのかどうかはわからない。私は三男だったからね。家には儀礼用の仮面もあったが、親父の代に他所の太夫に譲った。

いざなぎ流研究のこれから

現在いざなぎ流を研究しておる人たち課題として提供しておきたいことを幾つか述べてみよう。

今もつとも私が注目しているのは、神楽舞と、いわゆる手猿楽の二つの芸能が存在するという点で、この二つは当然系統別に考える必要があるのではないかと考えることである。

又、家祈禱の中心的な行事にえびす

ぐらえがあるが、これはよその事例と比較して検討する必要があると思う。なかでも馬になるえびすに対して馬が運びこむ宝を受け取る主婦の地位とその名称を今少し明確にしたい思いがある。

いざなぎ流と熊野信仰との関わりは重視されてよい。熊野領と目される大忍^{おしの}庄の街道にいざなぎ流の信仰圏があることは示唆的だ。

祭文の内容を細かくみて、時代や土地柄、思想などを読み取っていくことも可能だろう。時代でいえば、いざなぎ流の祭文は、室町時代の先か後か、又もう一つ、いざなぎ流に、この地方に深く根付いている平家伝説あるいは木地師の投影らしいものが判然としていないということは、いざなぎ流の成立を考える上で注意しておく必要がある。

ところで、昔は祭りの場に六人の太夫がいた。十二人いる必要があるのだが、コミコ十二を飾れば六人で十二人いると同じだといわれた。その六人に祈禱を受ける家の当主が太夫の資格で加わっていた。オンザキ様などをまつている家の当主は専門職としての太夫でなくても、祭りの作法を心得ていた。それだけいざなぎ流が暮らしに占める割合が大きかったのだね。

(文責 中村淳子)



ミコ神迎え

土佐の鰐口(2)

— 堀見家寄贈資料から —

岡本 桂典

堀見家から寄贈された資料群のなかに一口の鉄製鰐口がある。この鰐口がどのような形にして堀見家に所蔵されたのかその経緯は不明である。

鰐口は、一般に社寺の軒先に吊して用いられる鳴器で、信仰の対象でもある。かかる状況のものが、コレクションにされていることを考えるとやはりコレクターから堀見家にわたったものと考えるのが妥当であろう。

鰐口は小型で、直径二・一cm、厚さ五・五cm、耳は二・五cm、目は一・二cm突出する。面の両面に型持の穴がある。耳には鉄の鎖がついたままになっている。鰐口全体にやや土が付着している。撞座は、つぶれて明確ではな



鰐口(表)



鰐口(裏)

いが鋸歯状の撞座が鑄られている。もう一方の面の撞座は、円形のもの周辺に小さい丸い粒状のものを五個配置する形である。全体に黒色をなしているが、一部に錆が認められる。鰐口にみられる黒色は、黒漆が塗布されている可能性が考えられる。

銘帯には刻銘はない。また、赤外線撮影による墨書銘の存在も確認できなかった。ただ、一部点状に墨書と思われるものを二カ所確認した。かつては墨書銘があった可能性もある。この鰐口は、鎖がつき小型であるため小堂などにかけてられた鰐口と考えられ、鰐口の時期は江戸時代と思われる。

資料紹介

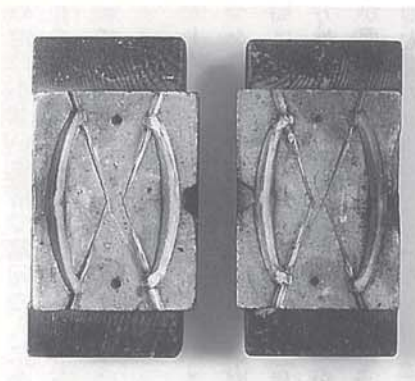
四万十川の漁具(1) イワの型

中村 淳子

今夏、当館では企画展「四万十川」の「漁の民俗誌」を開催した。展示物は漁具が中心だったが、図録では川漁師の語りや漁法の解説を主として、漁具の解説はわずかしか掲載しなかった。そこで、これから少しずつ四万十川の漁具を紹介していきたい。

さて、漁具を作る道具の中に「イワの型」というものがある。イワとは網のおもりのことをいう。この型では、一匁と一匁五分の二種類の重さのヒルと呼ばれる鉛のイワができる。

この型は、船大工の加用克之さんの仕事場の片隅に置かれていたところを見つけ、ご寄贈いただいたもので、克之さんの父上の辰美さんが使っていた



イワの型

という。船大工であり、川漁師でもあった辰美さんは、船大工道具や漁具を自分で作った。竹で竿を作ったり、溶かした鉛をこの型に流し込んでイワを作っていた他、鍛冶屋のようにファイゴを使って鋸さえうっていたという。船大工といっても船をつくるだけではなく、職人の複合的な在り方が注目される。

イワには、鉛の他に鉄のものや土錘、石錘があり、素材の違いが変遷を示している。石錘や土錘は縄文時代に遡るが、鉛のイワはそう古いものではないだろう。ただ、より詳細な変遷の中に鉛のイワを位置付けることも可能だろう。イワの型はそのための手掛かりを与えてくれる。

また、素材が違うイワは併存して、適所適材で使い分けられている。例えば、火振り漁では鉛のイワが柔らかくて石などに引っかけ易いため、イワが引っかけやすい岸近くには、堅くて引っかけにくい昔の鉄のイワをつけた網を入れるという方もいた。

川漁師こだわりの漁具には、多くの情報が秘められている。

土佐物語

岩原信守氏校注

『土佐物語』。多少なりとも土佐の歴史をかじったことのある人なら、聞き覚えのある書物だろう。長宗我部家の重臣吉田備後守重俊（大備後）の子孫、吉田孝世が宝永五（一七〇八）年に著した軍記物語である。

内容は、戦国初期から江戸初期に至る激動期の土佐を、主家長宗我部氏を中心に叙述したもので、文学作品として、また、戦国時代の雰囲気を知る貴重な歴史史料として、その魅力は一言では語り尽くせない。

この『土佐物語』のもつ歴史的な価値に魅了された岩原氏が、約一〇年の歳月をかけ、完璧な注釈を施したのが本書である。『土佐物語』の活字本は、これまでも黒川真道・川野喜代恵（大正三・昭和五三年）氏らによって刊行されているが、注釈がついておらず、一般向きではなかったため、本書の刊行は大変意義深いものがある。

校注者の岩原信守氏は、長らく南国市の公立学校に籍を置き、退職後も同市教委の教育委員を務める傍ら、当館の古文書解説専門員として勤務しておられる。書道・漢籍等に造詣が深く、

若い学芸員たちの師匠的存在でもある。本書はこうした氏の力量、特に史料解説に関するテクニクが遺憾なく発揮された結晶体である。

徹底した原本主義をとる岩原氏は、本書の校注を施すにあたり、六種類の写本（原本は残存しない）すべてを読破され、その中で和学講談所本（和学本）、森文庫本（森写本）、山内文庫本（山内本）をベースに、必要に応じて他の写本を参照しながら、最も読みやすく筋道の通った文章にするという、気の遠くなるような作業をこなされた。まさに歴史好きならずとも注目したい一冊である。（野本）

（明石書店発行 一〇、〇〇〇円）



子ども歴史教室

当館では、子どもたちが歴史に興味をもつきっかけになればと、「子ども歴史教室」を年数回行なっています。そこで今回は、八月に実施した三つの教室をご紹介します。

まずは「戦争のお話」。大正九年生まれの小川真喜子さんが、戦中、戦後の物が無い時代の苦労話やそんな中でたがいな思いやった家族の姿を語ってくださいました。戦時中の新聞やモンペ、千人針をしたチョッキなども拝見。

このような戦争体験を語り伝える場が、もっとも必要だと思えます。

「紙粘土で魚をつくろう」は、四万十展で漁具の近くに展示した解説員手作りの魚が好評でしたので、子どもたちに作り方を伝授したものです。初の解説員企画の子ども歴史教室でした。

「紙の建物をつくろう」は高知工業高等学校の溝渕博彦先生が、折り紙建築を教えてくださいました。子どもたちは、はじめはカッターを使うことも難しかったようですが、出来上がるとニコリ。物をつくる喜びにあふれた笑顔を見せてくれました。当館では、これからも子ども歴史教室の楽しいメニューを用意してお待ちしています。



歴史スポット⑭

スタンプコーナー PART II

来館者に好評の入館記念スタンプに新しいタイプが加わりました。屋外展示でお馴染みの「味元家住宅」とコミカルタッチの「一領具足くんII」の2点です。今後も龍馬くんスタンプなどの新シリーズを考えております。ご期待下さい。



10～12月の催し物

〔企画展〕

11.14～1.25	H10 いざなぎ流の宇宙 —神と人の物語—	高知県物部村に伝わる民間信仰「いざなぎ流」の祭文や御幣を展示し、その世界を紹介します。
------------	-----------------------------	---

〔講演会等〕 聴講無料 葉書にてお申し込み下さい（定員100名まで。先着順）

11.29 (土)	いざなぎ流公演	物部村いざなぎ流保存会の皆さん（予約不要・13～16時）
11.30 (日)	いざなぎ流講演会・シンポジウム	高木啓夫・小松和彦・山本ひろ子・斎藤英喜の各先生（10～16時）

〔講座〕

11.8 (土)	「民家に学ぶ」4 バス見学(奈半利町等)	溝渕博彦先生（高知工業高校教諭）〔申込受付終了〕
11.15 (土)	「民家に学ぶ」5 民家スケッチ	後藤孝一先生（高知県建築課）
12.6 (土)	「民家に学ぶ」6 民家平面図実測	田中耕輔先生（高知工業高校教諭）
12.20 (土)	いざなぎ流 1	梅野光興（当館学芸員）

〔史跡巡り〕

10.25 (土)	町並ウォッチングⅡ 香川県丸亀市本島町	瀬戸内海に浮かぶ本島にて、笠島の町並や塩飽水軍の史跡を見学します。〔申込受付終了〕
12.6 (土)	「新発見考古速報展'97」 見学（岡山県）	発掘された日本列島'97が岡山県立博物館で開催されます。バスで見学に行きます。〔参加ご希望の方は申込書を館までご請求下さい〕

〔子ども歴史教室〕 *電話などで事前にお申し込み下さい。先着30名

12.13 (土)	もちつき	もちつきを実演・体験します。〔エプロン等持参して下さい〕
-----------	------	------------------------------

〔企画コーナー〕

10.1 (水)～	—堀見家資料より— 熙助と勸業博覧会	佐川町の堀見馬氏から当館へ寄贈された資料のなかから、堀見熙助の明治十年代の勸業や内国勸業博覧会関係資料を展示します。
-----------	-----------------------	--

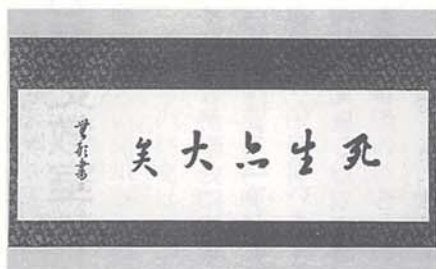
企画展予告

歴史と美術 —維新の群像—

前期：平成10年3月20日～4月19日

後期： 4月26日～5月31日（予定）

幕末期から明治時代にかけて活躍した著名な土佐人の書などを展示。



板垣退助五言書「生死亦大矣」
しせいもまたいだいなり

戊辰戦争の功により新政府の参議に任じられ、後、自由民権家として活躍した板垣退助の書。出典は『莊子』で、死生は人生の重大事件である。死ぬべきか、生き残るべきかは、重大なことであるから、進退を慎重にしなければならない、という意味。箱書きには竹村家四代当主が板垣に頼み揮毫してもらったもの、とある。

〔歴史館日録〕

月日	出来事
平成九年 七月一八日	「四万十川—漁の民俗誌—」展開幕
八月二日	子ども歴史教室「紙粘土で四万十川の魚をつくらうⅠ」
八月五日	講座「四万十川展示解説」
八月九日	夏休み子ども歴史教室
八月一六日	子ども歴史教室「戦争のお話」
八月二三日	企画展講演会
八月三〇日	子ども歴史教室「紙粘土で四万十川の魚をつくらうⅡ」
九月六日	子ども歴史教室「紙の建物をつくらう」
九月二〇日	連続講座「民家に学ぶ①」
九月二三日	企画展開幕

〈ひとこと〉

今年台風がくるのが、多かつたように思います。地球は生きています。（岡本）

平成九年十月十五日 編集・発行	高知県立歴史民俗資料館
〒783南国市岡豊町八幡1099-1	TEL 0888(62)2211
FAX 0888(62)2110	
開館時間 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)	
休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日) あたる場合は火曜日 12月28日、 1月4日	
入館料 通常期(常設展)大人(18才以上)400円 団体(20人以上)320円 高校生以下は無料	
療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳・障害者手帳(1・3級)所持者とその介護者(1名)、高知県長寿手帳所持者は無料 印刷・南 飛 鳥	